琉球大学学術リポジトリ

大学新入生の学部・学科選択と就業意識に関する研究 ー学部・学科種別による比較検討ー

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2010-05-24
	キーワード (Ja): 大学生, 学部・学科種別, 進学理由, 就業意識
	キーワード (En):
	作成者: 廣瀬, 等, 高良, 美樹, 金城, 亮, Hirose, Hitoshi, Takara, Miki, Kinjo, Akira
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/16930

大学新入生の学部・学科選択と就業意識に関する研究
－学部・学科種別による比較検討－

廣　瀬　　等
Hitoshi Hirose
高　良　美　樹
Miki Takara
金　城　　亮
Akira Kinjo

A Study of Freshman Course Choices and Career Plans: A Comparison by Type of Course

本研究では大学新入生を対象とし、大学進学における学部・学科選択と就業意識に関して、「単一型」と「多様型」という学部・学科種別による比較から検討を行うことを目的とした。質問紙では、大学進学理由、大学選択で重視した事柄、職業選択の各基準の重要性、職業レディネス尺度、大学への期待や納得、満足の程度などが測定された。分析の結果、免許取得など特定の目的をもち、カリキュラムもそれに向けて組まれている学部・学科である「単一型」の学生の方が、そうでない「多様型」の学生に比べて、大学や自分の将来についてより具体的な目標やイメージをもち、大学に対する期待や納得、満足も高いことが示された。

キーワード：大学生、学部・学科種別、進学理由、就業意識

背景と目的

高良・金城・廣瀬（2003）では、沖縄県の大学生における就業意識に関して、職業選択基準、将来つきたい・つきたくない職業、何のために働くのかなどについて検討を行った。その結果、職業選択基準では県内出身学生が相対的に“地元志向”および“雇用条件”を重視する傾向が強いことが示され、また、女子学生が男子学生に比べ、“勤務制度”や“社会貢献”を重視していることが明らかになった。さらに、将来つきたい職業としては、「事務系地方公務員」「中・高校文科系科目担任教諭」「事務系国家公務員」、将来つきたくない職業としては「フリーター」「セールスマン」「専業主婦・主夫」などが挙げられ、「つきたい職業」は職業選択の基準の枠組みに従い判断されており、一方、「つきたくない職業」はより具体的レベルにおけるイメージで「つきたくない」という判断がされている可能性が考えられた。働く理由については、「自分自身や家族の生活の糧を得るため」「余暇や趣味に使うお金を得るため」が多く選択され、自己および家族の経済的・実利的目的が優先されていた。

また、高良・金城・廣瀬（2004）では、沖縄県の４年制の大学生・短期大学生における就職意識に関して、職業選択基準、就職に関連した帰属因、働く理由といった観点から検討を行った。分析の結果、４年制の大学生に比べて短期大学生の方が“勤務制度”“地元志向”“人間関係”といった選択基準を重視していることがわかった。さらに、職業レディネスが高い群は“職務挑戦”“社会貢献”をより重視していることが明らかになった。また、就職達成のための帰属因としては、日頃の努力、自分の能力といった内的帰属がなされており、その傾向は職業レディネスが高い群においてより顕著であった。

ところで、これまでの研究では少なくても４カ月以上、大学に在籍している大学生を調査対象者として調査を行っており、その回答は「大学での教育

の影響」がプラスされたものであると考えることができる。大学生の就業意識の発達を検討する際には、大学での教育の影響を受けていない状況での基礎データも必要であると考えられる。そこで、本研究では髙良他（2003）と髙良他（2004）で調査された項目のいくつかについて、まだ大学に入学して間もない時点での基礎データを収集することを第１の目的とする。具体的には、「職業選択の各基準の重要性、職業レディネス尺度、進路選択に対する自己効力感尺度、何のために働くか」について、これまでに行われた尺度を用いて測定を行う。

さらに、新入生の就業意識ということを考えると、まず大学の進学に関連して、どのような意識をもつかということも重要な検討課題になる。例えば、大学で学ぶ動機や理由、進学にあたって何を重視したかなどについて、桜井（1991）や文部省（1996）などで検討されている。桜井（1991）では、教育学部生に大学で学ぶ動機や理由について42項目からなる質問紙を実施し、５つの因子（向上志向、モラトリアム志向、教師志向、学問志向、アイデンティティ志向）を見いだした。そこで本研究では、大学の進学に関連して、新入生がどのような意識であるかを明らかにすることを第２の目的とし、「大学進学理由、大学選択で重視した事柄、大学に進学できたことについての原因帰属、現在の専攻・専門と将来の就職との関連の意識、大学への期待の程度、大学の納得の程度、大学の満足の程度」について新たに検討する。

なお、大学の学部や学科について考えると、医師、学校教員、保育士などの免許取得を目的とし、カリキュラムもそれに向けて組まれている学部・学科と、特にそのような特定の目的ではない学部・学科に分けて考えることができる。大学進学や将来の就業について考える場合も、両学部・学科の学生では考え方の違いがあるとも考えられる。免許取得など特定の目的をもち、カリキュラムもそれに向けて組まれている学部・学科へ進学しようと考える学生は、そうでない学部・学科へ進学しようと考える学生に比べて、より将来への具体的なイメージをもって進学する学生が多いと考えられる。そして、

それは大学の進学に関連する意識や就業意識などにも影響を与えている可能性がある。そこで、本研究では先に示した２つの目標について、上に挙げた２つの学部・学科種別の違いを独立変数として設定し、比較、検討する。なお、本研究では、特定の目的をもち、カリキュラムもそれに向けて組まれている学部・学科に所属する学生を、基本的に学部・学科の目標が単一であることから「単一型」、特にそのような特定の目標はもたない学部・学科に所属する学生を、基本的に学部・学科の目標が単一ではないことから「多様型」と定義して検討を進めることにする。

これらのことを踏まえ、本研究では大学新入生を対象とし、大学進学における学部・学科選択と就業意識に関して、「単一型」と「多様型」という学部・学科種別による比較から検討を行うことを目的とする。

方　法

調査対象者：沖縄県内の２カ所の４年制大学に通う大学生522名（男子278名、女子244名）、および２カ所の短期大学に通う大学生269名（男子12名、女子257名）の計791名の新入生を対象に、４月に調査を実施した。そして、本研究では、医師、学校教員、保育士などの免許取得を目的とし、カリキュラムもそれに向けて組まれている学部・学科（医学部、教育学部、保育科、児童教育科）に所属する学生を「単一型」（397名）とし、その他の学部・学科（法文学部、理学部、工学部、農学部、国際学部）に所属する学生を「多様型」（394名）として定義した。なお、欠損値のあるケースがあるため、分析によって対象者数が異なる場合がある。

質問項目：①大学進学理由：桜井（1991）および文部省（1996）の調査項目を参考に、大学進学理由について「専門的な知識や技術を身につけたかったから」「自分が本当にしたいことを見つけたかったから」「自分の希望している職業に必要な資格を取りたかったから」などを含む15項目を作成した。

評定は、「まったくあてはまらない」（1点）～「非常にあてはまる」（5点）の5件法とした。

②大学選択で重視した事柄：文部省（1996）の調査項目を参考に、大学選択で重視した事柄について「将来の仕事に役立つ知識や技術を身につけられる」「自分の興味のある分野が学べること」「自分の成績で入れること」などを含む9項目を作成した。評定は、「まったく重視しなかった」（1点）～「非常に重視した」（5点）の5件法とした。

③大学に進学できたことについての原因帰属：原因帰属理論における3次元（内的－外的、安定－不安定、統制可能－不可能）に基づき、大学に進学できた原因についての「入学試験の難易度」「試験・面接時のがんばり」「自分の能力」などを含む9項目を作成した。評定は、「関連していない」（1点）～「非常に関連している」（5点）の5件法とした。

④現在の専攻・専門と将来の就職との関連：現在の専攻・専門と将来の就職との関連について、「ぜひとも専攻・専門と関連のある仕事につきたい」「なるべく専攻・専門をいかせる仕事につきたい」などの他、「その他（具体的に記入）」を含む5つの選択肢の中から該当する項目を1つを選択することを求めた。

⑤職業選択の各基準の重要性：若林・後藤・鹿内（1983）の職業志向尺度を参考に適宜、語句の修正、項目の追加を行った高良他（2003）に、さらに項目の削除、追加を行った高良他（2004）で用いられた尺度を使用した。尺度は、「職務挑戦」「人間関係」「雇用条件」「地元志向」「勤務制度」「社会貢献」の6因子からなっていた。職務挑戦因子は、「自分の力で何事かを成しとげる機会があること」「自分の能力がためされる機会があること」などを含む因子であり、人間関係因子は、「仕事仲間との人間関係がよいこと」「上司との人間関係がよいこと」などを含む因子、雇用条件因子は、「給与やボーナスが高いこと」「昇進の可能性が高いこと」などを含む因子であった。さらに、地元志向因子は、「現在の居住地から通勤可能であること」「勤務地が

地元（出身地）であること」などを含む因子であり、勤務制度因子は、「有給休暇（介護、育児など）制度が充実していること」「職場が男女平等であること」などを含む因子、社会貢献因子は、「人の役に立つ仕事であること」「仕事をつうじて社会に役立つこと」などを含む因子であった。項目数は、全体で25項目であった。評定は、「まったく重視しない」（１点）～「非常に重視する」（５点）の５件法とした。

⑥職業レディネス尺度：若林他（1983）の職業レディネス尺度を参考に作成し、大学生を対象に実施した結果（髙良・金城，2001）に基づき、代表的な５項目を選定した髙良他（2004）で用いられた尺度を使用した。項目は、「自分は職業の上で将来の目標があるので、それを実現させるために自分でいろいろ考えてやっていく」「自分の選んだ職業を通じて、自分にどれだけ力があるのか確かめてみることに、大きな関心をもっている」などを含む５項目であった。評定は、「まったくあてはまらない」（１点）～「非常にあてはまる」（５点）の５件法とした。

⑦進路選択に対する自己効力感尺度：浦上（1995）を参考に作成し、大学生を対象に実施した結果（髙良・金城，2001）に基づき、代表的な５項目を選定した髙良他（2004）で用いられた尺度を使用した。項目は、「自分の将来設計にあった職業を探すこと」「自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶこと」などを含む５項目であった。評定は、「まったく自信がない」（１点）～「非常に自信がある」（５点）の５件法とした。

⑧何のために働くか：髙良他（2003）で用いられた尺度を使用した。自分が何のために働くのかについて「達成感を得る」「自分の能力や創造性を発揮する」「趣味や興味を仕事で実現する」などの他、「その他（自由記述）」を含む10の選択肢の中から該当する項目を全て選択することを求めた。

他に、調査対象者の年齢や性別のような個人属性、学科・学年、出身地、さらに、入学した学部・学科が第何志望か、大学への期待の程度、大学の納得の程度、大学の満足の程度といった付加的な質問項目を加えた。

なお、質問項目全般に関する教示内容と回答方法については、付録として掲載した。

調査時期：2003年度入学生が大学に入学してすぐの2003年４月に実施された。

結果と考察

１．大学進学理由について

最初に、質問１「大学進学理由」15項目についての因子構造を見いだすために因子分析を用いて検討を試みた。因子数の指定に関しては、探索的に分析結果を検討することにした。まず、因子数を指定せずに主因子法による分析を試みたところ、固有値1.0以上で４因子解が得られた。バリマックス回転後の負荷量平方和は37.8％であった。ただし、共通性が低い（.292）項目である「４　大学・短大を出た方が就職や就職後の昇進に有利だと思ったから」、複数の因子にまたがっていた項目である「13　自分を高めたかったから」が存在したので、それら２項目を除き、13項目で再度因子分析を試みた。先の分析と同様に、因子数を指定せずに主因子法による分析を試みたところ、固有値1.0以上で４因子解が得られ、バリマックス回転後の負荷量平方和は40.0％となった（表１）。

これらの結果に基づき、負荷量平方和の累積％が低すぎないこと、共通性の低い項目がないこと（最低が.410）、因子構造の解釈がしやすいことを考慮した上で、４因子が適当であると判断した。

次に、各因子における負荷量が上位、かつ因子所属が比較的明瞭で、概念的にもまとまりのよさそうな項目を中心に因子名の命名を行った。因子Ｉは「９　大学・短大に進学してから、自分に合った職業を考えたかったから」「２　自分が本当にしたいことを見つけたから」「15　自分が納得できる生き方を見つけたかったから」「５　視野を広げたかったから」の４項目から構

表１　大学進学理由項目尺度の因子分析結果

	項　　目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	共通性
9	大学・短大に進学してから、自分に合った職業を考えたかったから	.645	-.281	.129	.127	.528
2	自分が本当にしたいことを身につけたかったから	.638	.004	.059	-.044	.412
15	自分が納得できる生き方を見つけたかったから	.584	.126	.007	.050	.356
5	視野を広げたかったから	.543	.183	-.054	.096	.340
1	専門的な知識や技術を身につけたかったから	.098	.654	-.069	-.103	.453
8	自分の好きな勉強をしたかったから	.211	.556	-.155	.036	.380
3	大学・短大を出た方が就職や就職後の昇進に有利だと思ったから	-.059	.527	-.039	-.123	.298
10	先生がすすめたから	.059	-.090	.749	.113	.586
11	家族がすすめたから	.027	-.140	.649	.202	.483
6	まわりのみんなが大学・短大に進学したから	.018	-.206	.235	.552	.403
12	大学・短大に進学するのは当然だと思っていたから	-.058	-.084	.118	.501	.276
7	大学・短大の学生生活を楽しみたかったから	.283	.118	-.033	.489	.334
14	まだ就職したくなかったから	.142	-.363	.150	.410	.342
	因子分散	1.624	1.367	1.129	1.073	5.193
	全分散に対する寄与率(%)	12.496	10.516	8.685	8.256	39.953

成されており、“向上志向”因子と命名した。因子Ⅱは「１　専門的な知識や技術を身につけたかったから」「８　自分の好きな勉強をしたかったから」「３　自分の希望している職業に必要な資格を取りたかったから」の３項目から構成されており、“専門志向”因子と命名した。因子Ⅲは「10　先生がすすめたから」「11　家族がすすめたから」の２項目から構成されており、“他者の勧め”因子と命名した。因子Ⅳは「６　まわりのみんなが大学・短大に進学したから」「12　大学・短大に進学するのは当然だと思っていたから」「７　大学・短大の学生生活を楽しみたかったから」「14　まだ就職したくなかったから」の４項目から構成されており、“モラトリアム志向”因子と命名した。α係数は、因子Ⅰから順に、.68、.58、.67、.59であった。

桜井（1991）では、大学で学ぶ動機・理由として、“向上志向”、“モラトリアム志向”、“教師志向”、“学問志向”、“アイデンティティ志向”の５因子が見いだされた。本研究の結果との関連を見ると、“モラトリアム

志向”因子については、同様な結果であったといえる。ただし、本研究で示された“向上志向”因子は、桜井（1991）で示された“向上志向”と“アイデンティティ志向”の合わさったものとなっており、同様に、本研究で示された“専門志向”因子は、桜井（1991）で示された“専門志向”と“教師志向”の合わさったものとなっているといえる。つまり、本研究の結果では、アイデンティティの獲得と向上志向、専門志向と希望する職業への志向は分かちがたいものであったといえる。また、本研究では、新たな因子として“他者の勧め”が見いだされた。これは、大学で学ぶ動機・理由の１つとして、先生や家族の影響の可能性があることを示唆するものだといえる。

続いて、単一型群と多様型群で各因子を構成する下位尺度ごとに差があるかどうかを検討するために、各因子の下位尺度の合計値について t 検定を行った。その結果、向上志向、専門志向、モラトリアム志向の各因子で0.1％水準で有意な差が認められ、単一型群の学生の方が多様型群の学生に比べて、専門志向は高く、向上志向とモラトリアム志向は低いことがわかった。また、他者の勧め因子でも傾向差（$p<.10$）が認められ、単一型群の学生の方が多様型群の学生に比べて、先生や親の勧めによる理由が低い傾向にあることがわかった（表２）。

これらの結果から、医師、学校教員、保育士などの免許取得を目的としてカリキュラムも組まれており、多くの学生において卒業後の進路が方向づけられているとも考えられる単一型群の学生は、特に特定の進路が方向づけられていない多様型群の学生に比べて、入学時において、専門志向が高く、向上志向、モラトリアム志向が低いことがわかったといえる。また、単一型群の学生は多様の学生に比べて、先生や親の勧めによって進学を決定している傾向が低いこともわかった。これは、単一型群の学生が受験の段階ですでに卒業後の将来も考えており、入学時においてより具体的な目的をもち、専門志向をもっていることを示していると考えられる。

表２　大学進学理由の各因子の単一型・多様型別評定平均値

因　子		単一型	多様型	t 値
向上志向	平均	14.16	15.36	
（４項目）	SD	3.30	3.43	-5.01***
	n	394	391	
専門志向	平均	13.59	12.22	
（３項目）	SD	1.71	2.17	9.73***
	n	396	390	
他者の勧め	平均	3.59	3.85	
（２項目）	SD	1.91	2.06	-1.83'
	n	396	392	
モラトリアム志向	平均	10.14	11.80	
（４項目）	SD	3.35	3.40	-6.84***
	n	386	388	

'p<.10,　***p<.001

２．大学選択で重視した事柄について

質問２「大学選択で重視した事柄」９項目について、単一型群と多様型群で平均に差があるかどうかを検討するために、それぞれの項目の評定値について t 検定を行った。その結果、項目１「将来の仕事に役立つ知識や技術を身につけられる」、項目２「自分の興味のある分野が学べること」、項目５「就職実績が良いこと」、項目６「学風（学校の雰囲気）がよいこと」、項目７「学費が安いこと」において0.1％水準で有意な差が見いだされ、項目９「キャンパスの環境が良いこと」では傾向差（p<.10）が認められた。項目７のみ、多様型群が単一型群に比べて得点が高く、その他の項目はいずれも単一型群の方が多様型群に比べて得点が高い結果であった。なお、他の項目「３　自分の成績で入れること」「４　有名大学・短大であること」「８　通学に便利なこと」では、有意な差は認められなかった（表３）。

これらの結果から、単一型群の学生は多様型群の学生に比べて、「大学でどのようなことが学べ、知識や技術を身につけられるか」、さらに、「自分の興味のある分野を学べるか」などをより重視した大学選択をしていることがわかった。これは、大学進学理由の部分でも考察されたが、単一型群の学生

表3　大学選択で重視した事柄についての単一型・多様型別評定平均値

項　　目		単一型	多様型	t 値
1．将来の仕事に役立つ知識や技術を身につけられること	平均	4.68	4.10	
	SD	0.65	0.95	9.86***
	n	396	393	
2．自分の興味のある分野が学べること	平均	4.54	4.30	
	SD	0.76	0.92	3.95***
	n	395	391	
3．自分の成績で入れること	平均	3.51	3.51	
	SD	1.18	1.24	-0.60
	n	396	392	
4．有名大学・短大であること	平均	2.42	2.35	
	SD	1.16	1.07	0.92
	n	397	392	
5．就職実績が良いこと	平均	2.94	2.57	
	SD	1.38	1.24	3.97***
	n	397	394	
6．学風(学校の雰囲気)が良いこと	平均	3.41	3.00	
	SD	1.19	1.19	4.85***
	n	397	394	
7．学費が安いこと	平均	3.02	3.36	
	SD	1.19	1.21	-3.87***
	n	396	394	
8．通学に便利なこと	平均	2.43	2.49	
	SD	1.28	1.28	-0.75
	n	395	393	
9．キャンパスの環境が良いこと	平均	3.25	3.10	
	SD	1.17	1.16	1.76†
	n	397	394	

†$p<.10$,　***$p<.001$

が受験の段階ですでに卒業後の将来も考えており、入学時においてより具体的な目的をもち入学していることを示す結果であると考えられる。

3．大学に進学できたことについての原因帰属について

質問3「大学に進学できたことについての原因帰属」9項目について、単一型群と多様型群で平均に差があるかどうかを検討するために、それぞれの項目の評定値について t 検定を行った。その結果、項目2「試験・面接の時

のがんばり」、項目６「日頃の努力の積み重ね」、項目８「先生・親の助け」において0.1％水準、項目５「試験・面接当日の体調・気分」、項目７「入学した学部・学科の入試問題の傾向」において１％水準、項目４「運・偶然」においても５％水準でそれぞれ有意な差が見いだされた。いずれも多様型群に比べて単一型群の得点が高い結果であった。他の項目「１　入学試験の難易度」「３　自分の能力」「９　自分の学力」では、有意な差は認められなかった（表４）。

表４　大学進学の原因帰属についての単一型・多様型別評定平均値

項　　目		単一型	多様型	t 値
１．入学試験の難易度	平均	3.45	3.53	
(外的・安定・統制不可能)	SD	1.13	1.22	-0.94
	n	396	394	
２．試験・面接の時のがんばり	平均	4.11	3.65	
(内的・不安定・統制可能)	SD	0.87	1.25	5.98***
	n	397	394	
３．自分の能力	平均	3.59	3.58	
(内的・安定・統制不可能)	SD	0.93	1.06	0.09
	n	395	394	
４．運・偶然	平均	3.27	3.06	
(外的・不安定・統制不可能)	SD	1.22	1.31	2.37*
	n	396	392	
５．試験・面接当日の体調・気分	平均	3.32	3.04	
(内的・不安定・統制不可能)	SD	1.18	1.28	3.28**
	n	397	394	
６．日頃の努力の積み重ね	平均	4.03	3.71	
(内的・安定・統制可能)	SD	1.04	1.19	3.93***
	n	396	393	
７．入学した学部・学科の入試問題の	平均	3.19	2.96	
傾向（外的・安定・統制可能）	SD	1.18	1.20	2.69**
	n	396	392	
８．先生・親の助け	平均	4.09	3.76	
(外的・不安定・統制可能)	SD	1.08	1.23	4.03***
	n	396	393	
９．自分の学力	平均	3.68	3.74	
(内的・安定・統制不可能)	SD	0.95	1.07	-0.81
	n	397	394	

注)括弧内は原因帰属の特徴を示す　　*$p<.05$, **$p<.01$, ***$p<.001$

これらの結果は、概して原因帰属の「安定」で「統制不可能」な要因については、単一型群と多様型群で原因帰属に違いが見られないが、その他の要因では、単一型群と多様型群で原因帰属に違いが見られたことを示唆する。具体的には、「安定」で「統制可能」な項目６、項目７や、「不安定」で「統制不可能」な項目４や項目５、「不安定」で「統制可能」な項目２や項目８において、多様型群に比べて単一型群の得点が高い結果であったといえる。この結果は、単一型群の学生がより大学進学について、多くの原因に帰属を行っていることを示すものであるといえる。

４．現在の専攻・専門と将来の就職との関連について

質問４「現在の専攻・専門と将来の就職との関連」では、５つの選択肢の中から該当する項目を１つを選択することを求めた。そこで、各項目について単一型群と多様型群で選択率に差があるかどうかを検討するために、χ^2検定を行った。その結果、１％水準で有意な違いが認められた（表５）。

表５　現在の専攻・専門と将来の就職との関連についての単一型・多様型別項目選択数

項　　目	単一型	多様型
１．ぜひとも専攻・専門と関連のある仕事につきたい	256 (64.6%)	162 (41.3%)
２．なるべく専攻・専門をいかせる仕事につきたい	107 (27.0%)	153 (39.0%)
３．就職のときはいかせなくても、将来は専攻・専門と関連のある仕事につきたい	17 (4.3%)	29 (7.4%)
４．現在の専攻・専門と就職とは関連しなくてよい	11 (2.8%)	41 (10.5%)
５．その他	5 (1.3%)	7 (1.8%)

$\chi^2(4)=50.03,\ p<.01$

さらに、残差分析を行ったところ、項目１「ぜひとも専攻・専門と関連のある仕事につきたい」、項目２「なるべく専攻・専門をいかせる仕事につきたい」、項目４「現在の専攻・専門と就職とは関連しなくてよい」において、５％水準で選択率の有意な差が認められた。項目３「就職のときはいかせなくても、将来は専攻・専門と関連のある仕事につきたい」についても傾向差（p<.10）が認められた。項目５「その他」については、有意な差がなかった。選択率の違いをまとめてみると、項目１については単一型群の方が多様型群に比べて選択率が高く、項目２・３・４については多様型群の方が単一型群に比べて選択率が高かった。これらの結果は、単一型群の方が、より現在の専攻・専門と関連のある仕事につきたいという明確な意志をもっていることを示すものだといえる。

５．職業選択の各基準の重要性について

最初に、質問５「職業選択の各基準の重要性」25項目について、因子構造を確認するための因子分析を行った。まず、因子数を指定せずに主因子法による分析を試みたところ、髙良他（2003;2004）と同様に、固有値1.0以上で６因子解が得られた。バリマックス回転後の負荷量平方和は49.7％であった。ただし、共通性が低い（.387）項目である「19　勤務時間に柔軟性が（フレックス・タイムなど）があること」、複数の因子にまたがっていた項目である「10　家庭的な雰囲気の職場であること」が存在したので、それら２項目を除き、23項目で再度因子分析を試みた。先の分析と同様に、因子数を指定せずに主因子法による分析を試みたところ、固有値1.0以上で６因子解が得られ、バリマックス回転後の負荷量平方和は51.1％となった（表６）。

因子のまとまりは、髙良他（2003;2004）と同様であり、因子Ⅰは「14　自分の力で何事かを成しとげる機会があること」「12　自分の能力がためされる機会があること」「８　困難な仕事へ挑戦する機会があること」などの５項目から構成される“職務挑戦”因子であった。因子Ⅱは「11　仕事をつ

表6　職業選択基準項目尺度の因子分析結果

	項　　目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	因子Ⅴ	因子Ⅵ	共通性
14	自分の力で何事かを成しとげる機会があること	.687	.235	-.058	-.054	.079	.195	.577
12	自分の能力がためされる機会があること	.670	.289	-.051	-.025	.032	.149	.559
8	困難な仕事へ挑戦する機会があること	.594	.292	.004	-.099	.142	-.093	.477
13	仕事をつうじて社会に役立つこと	.591	.231	-.121	-.031	.019	.346	.538
3	創造性・独創性を発揮する機会があること	.555	.039	.112	-.063	.092	-.008	.335
11	仕事をつうじて社会に役立つこと	.195	.753	-.018	.034	.064	.210	.655
17	人に役に立つ仕事であること	.179	.713	-.024	.124	.077	.297	.650
25	社会に貢献している実感がもてること	.244	.657	.085	.110	.110	.064	.526
9	社会的責任のある仕事であること	.393	.567	.081	-.010	.057	-.028	.487
2	給料やボーナスが高いこと	-.075	-.054	.750	.085	.039	.091	.587
5	昇進の可能性が高いこと	.230	.033	.648	.147	.151	.010	.518
1	安定した会社や勤め先であること	-.227	.071	.598	.194	.098	.192	.498
4	勤め先の福利厚生施設が充実していること	.234	.051	.460	.133	.192	.193	.361
16	終身雇用制であること	-.129	.066	.445	.288	.123	.187	.352
23	現在の居住地から通勤可能であること	-.038	.043	.141	.806	.050	.158	.700
18	勤務地が地元(出身地)であること	-.107	.092	.129	.674	.007	.115	.504
24	転勤がないこと	-.047	.040	.259	.582	.122	-.014	.424
7	仕事仲間との人間関係がよいこと	.141	.115	.100	.073	.819	.123	.734
6	上司との人間関係がよいこと	.125	.074	.267	.054	.778	.193	.737
15	職場のみんなから受け入れられること	.091	.189	.227	.195	.389	.315	.384
22	有給休暇(介護，育児など)制度が充実していること	.008	.025	.345	.173	.172	.539	.470
21	職場が男女平等であること	.149	.198	.157	.073	.151	.494	.358
20	取得した資格が活用できる機会があること	.148	.243	.134	.105	.129	.452	.331
	因子分散	2.500	2.288	2.193	1.748	1.661	1.373	11.763
	全分散に対する寄与率(%)	10.868	9.949	9.536	7.602	7.222	5.970	51.147

うじて社会に役立つこと」「17　人の役に立つ仕事であること」「25　社会に貢献している実感がもてること」などの４項目から構成される“社会貢献”因子であった。因子Ⅲは「2　給料やボーナスが高いこと」「5　昇進の可能性が高いこと」「1　安定した会社や勤め先であること」などの５項目から構成される“雇用条件”因子であった。因子Ⅳは「23　現在の居住地から通勤可能であること」「18　勤務地が地元（出身地）であること」「24　転勤

がないこと」の３項目から構成される“地元志向”因子であった。因子Ⅴは「7　仕事仲間との人間関係がよいこと」「6　上司との人間関係がよいこと」「15　職場のみんなから受け入れられること」の３項目から構成される“人間関係”因子であった。因子Ⅵは「22　有給休暇（介護、育児など）制度が充実していること」「21　職場が男女平等であること」「20　取得した資格が活用できる機会があること」の３項目から構成される“勤務制度”因子であった。α係数は、因子Ⅰから順に、.79、.82、.75、.76、.78、.65であった。

続いて、単一型群と多様型群で各因子を構成する下位尺度ごとに差があるかどうかを検討するために、各因子の下位尺度の合計値について t 検定を行った。その結果、社会貢献、地元志向、勤務制度の各因子で0.1％水準、人間関係因子で５％水準で有意な差が認められ、いずれも単一型群の学生の方が多様型群の学生に比べて高いことがわかった（表７）。

表７　職業選択基準項目尺度の各因子の単一型・多様型別評定平均値

因　子		単一型	多様型	t 値
職務挑戦	平均	19.90	19.64	
（５項目）	SD	3.10	3.39	1.13
	n	397	392	
社会貢献	平均	16.13	14.67	
（４項目）	SD	2.87	3.37	6.50***
	n	396	390	
雇用条件	平均	18.12	18.08	
（５項目）	SD	3.72	3.40	0.17
	n	393	393	
地元志向	平均	9.49	8.46	
（３項目）	SD	3.31	3.29	4.41***
	n	395	392	
人間関係	平均	12.86	12.55	
（３項目）	SD	2.12	2.12	2.01*
	n	395	392	
勤務制度	平均	12.97	12.36	
（３項目）	SD	2.11	2.24	3.97***
	n	397	393	

*p<.05,　***p<.001

これらの結果から、単一型群の学生は多様型群の学生に比べて、就職する際により多くの基準について重視すると考えていることがわかる。これは、単一型群の学生が多様型群の学生に比べて、入学時において将来に対するより具体的なイメージをもち、就職についてもより具体的なイメージを描いて選択基準をもち、判断していることを示していると考えられる。

6．職業レディネス尺度について

質問6「職業レディネス尺度」（1因子尺度）5項目の合計値について、単一型群と多様型群で差があるかどうかを検討するために t 検定を行った（単一型：n=393, $\overline{X}$=16.16, SD=2.05; 多様型：n=392, $\overline{X}$=15.38, SD=2.31）。その結果、統計的に有意な差（$t(783)=4.95$, $p<.001$）が認められ、多様型群に比べて単一型群の得点が高い結果であり、単一型群は多様型群に比べて職業レディネスが高いことがわかった。

7．進路選択に対する自己効力感尺度について

質問7「進路選択に対する自己効力感尺度」（1因子尺度）5項目の合計値について、単一型群と多様型群で差があるかどうかを検討するために t 検定を行った（単一型：n=393, $\overline{X}$=14.21, SD=2.67; 多様型：n=390, $\overline{X}$=13.47, SD=2.98）。その結果、統計的に有意な差（$t(781)=3.66$, $p<.001$）が認められ、多様型群に比べて単一型群の得点が高い結果であり、単一型群は多様型群に比べて進路選択に対する自己効力感が高いことがわかった。進路選択に対する自己効力感の結果は、職業レディネスと同様なものとなったが、これは髙良他（2004）においても認められており、2つの尺度の関連性が本研究でも示されたといえる。

8．何のために働くかについて

質問8「何のために働くか」では、自分が何のために働くのかについて

「達成感を得るため」「自分の能力や創造性を発揮するため」「趣味や興味を仕事で実現するため」などの他、「その他（自由記述）」を含む10の選択肢の中から該当する項目を全て選択することを求めた。そこで、各項目について、単一型群と多様型群で選択率に差があるかどうかを検討するために、それぞれの項目ごとにχ^2検定を行った。その結果、項目４・６において0.1％水準、項目８において５％水準で有意な違いが認められた。具体的には、「６　地域や社会に貢献するため」では、単一型群の方が多様型群に比べて選択率が高い結果であり、「４　余暇や趣味に使うお金を得るため」「８　自分自身や家族の生活の糧を得るため」では、多様型群の方が単一型群に比べて選択率が高い結果であった（表８）。

表８　何のために働くかについての単一型・多様型別項目選択数

項　　目	単一型		多様型		χ^2 値
	非選択	選　択	非選択	選　択	
1．達成感を得るため	203	194	223	171	2.38
	(51.1%)	(48.9%)	(56.6%)	(43.4%)	
2．自分の能力や創造性を発揮するため	142	255	158	236	1.58
	(35.8%)	(64.2%)	(40.1%)	(59.9%)	
3．趣味や興味を仕事で実現するため	180	217	196	198	1.54
	(45.3%)	(54.7%)	(49.7%)	(50.3%)	
4．余暇や趣味に使うお金を得るため	222	175	170	224	12.90***
	(55.9%)	(44.1%)	(43.1%)	(56.9%)	
5．職場の人々や顧客との交流のため	287	110	295	99	0.68
	(72.3%)	(27.7%)	(74.9%)	(25.1%)	
6．地域や社会に貢献するため	206	191	263	131	18.10***
	(51.9%)	(48.1%)	(66.8%)	(33.2%)	
7．社会の一員として認められるた	249	148	269	125	2.70
	(62.7%)	(37.3%)	(68.3%)	(31.7%)	
8．自分自身や家族の生活の糧を得るため	117	280	89	305	4.86*
	(29.5%)	(70.5%)	(22.6%)	(77.4%)	
9．働かないのは世間体が悪いため	362	35	356	38	0.16
	(91.2%)	(8.8%)	(90.4%)	(9.6%)	
10．その他	377	20	373	21	0.03
	(95.0%)	(5.0%)	(94.7%)	(53.3%)	

n=791；*p<.05，***p<.001

これらの結果から、単一型群ではより社会的な目標をもち、多様型群ではより個人的な目標をもっていることが示唆される。単一型群がより社会的な目標をもった一因には、対象者が医師、学校教員、保育士などの免許取得を目的とするような、学部・学科に所属する学生であることが考えられる。また、多様型群ではより個人的なレベルで目標をとらえていることがわかった。

9．大学への期待、納得、満足の程度について

大学への期待の程度、大学の納得の程度、大学の満足の程度について、単一型群と多様型群で平均に差があるかどうかを検討するため、それぞれの項目の評定値について t 検定を行った。その結果、大学の納得の程度、大学の満足の程度において0.1％水準、大学への期待の程度において１％水準で有意な違いが認められた。具体的には、すべてにおいて多様型群に比べて単一型群での平均が高い結果であり、単一型群は多様型群に比べて、大学に対してより期待をもち、納得し、満足しているといえる（表９）。

表９　大学への期待、納得、満足の程度の単一型・多様型別評定平均値

項　目		単一型	多様型	t 値
大学への期待	平均	4.14	3.93	
	SD	0.89	0.97	3.18**
	n	396	393	
大学への納得	平均	4.17	3.91	
	SD	0.91	1.02	3.86***
	n	397	392	
大学への満足	平均	3.99	3.60	
	SD	0.94	0.99	5.56***
	n	397	393	

**$p<.01$,　***$p<.001$

10. まとめ

本研究では大学新入生を対象とし、大学進学における学部・学科選択と就業意識に関して、「単一型」と「多様型」という学部・学科種別による比較から検討を行うことを目的とした。

まず大学進学に関連した分析の結果、単一型群は多様型群に比べて、入学時においてすでに、専門志向が高く、向上志向、モラトリアム志向が低いことがわかった。また、単一型群は「大学でどんなことが学べ、知識や技術を身につけられるか」、さらに、「自分の興味のある分野を学べるか」などをより重視した大学選択をしており、受験の段階ですでに卒業後の将来も考え、入学時においてより目的をもち入学していることが示された。また、単一型群は多様型群に比べて、より大学進学について、多くの原因に帰属を行っており、多くの視点から大学進学ができたことをとらえていることがわかった。現在の専攻・専門と関連のある仕事につきたいという明確な意志をもっていることも示されており、大学に対する期待、納得、満足の程度も、単一型群は多様型群に比べて高い結果であった。

次に就業意識関連の分析の結果からは、単一型群の学生が多様型群の学生に比べて、就職する際により多くの基準について重視すると考えており、また、単一型群の学生は多様型群の学生に比べて、職業レディネスや進路選択に対する自己効力感が高いことがわかった。さらに、単一型群ではより社会的な目標をもち、多様型群ではより個人的な目標をもっていることが示唆された。

これらの結果から、単一型群の新入生は多様型群の新入生に比べて、受験の段階でもより深く将来について考えており、現在もより将来の就業への展望をもち、目標をもって生活していることがわかる。そのため、現在の学習活動も将来の目標を考えた上での活動になっており、大学生活への期待や満足も高いといえる。ただし、これはあくまでも入学直後の意識に関する調査であり、本研究の結果を基礎とした、大学教育が行われて後の経年変化をみ

る研究が必要であろう。また、本研究により、学部・学科種別の違いにより、入学直後の段階でも就業意識に対する大きな違いが確認されたことから、大学卒業後に向けた進路指導の際には、学部・学科の違いを考慮したきめ細かい指導のあり方も求められると考えられる。

引用文献

文部省　1996　平成６年度　学校教育と卒業後の進路に関する調査報告書　大蔵省印刷局

桜井茂男　1991　教育学の学生が大学で学ぶ動機・理由と社会的不適応の関係　奈良教育大学教育研究所紀要，27，123-130.

髙良美樹・金城　亮　2001　インターンシップの経験が大学生の就業意識に及ぼす効果－職業レディネスおよび進路選択に対する自己効力感を中心として　琉球大学法文学部人間科学紀要　人間科学，8，39-57.

髙良美樹・金城　亮・廣瀬　等　2003　沖縄県の大学生における就業意識についての基礎的研究　琉球大学法文学部人間科学紀要　人間科学，11，331-357.

髙良美樹・金城　亮・廣瀬　等　2004　沖縄県の大学生・短期大学生における就業意識についての基礎的研究（２）　琉球大学法文学部人間科学紀要　人間科学，13（印刷中）

浦上昌則　1995　学生の進路選択に対する自己効力に関する研究　名古屋大学教育学部紀要　教育心理学科，42，115-126.

若林　満・後藤宗理・鹿内啓子　1983　職業レディネスと職業選択の構造－保育系、看護系、人文系女子短大生における自己概念と職業意識との関連－　名古屋大学教育学部紀要，30，63-98.

付録　質問紙の調査項目

Ⅰ．あなたが大学・短大に進学しようと思ったのは、どのような理由からですか。それぞれの項目について、自分の気持ちにもっとも近い程度を１つだけ選んで、数字に○印をつけてください。

		まったくあてはまらない	やあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	非常にあてはまる
1	専門的な知識や技術を身につけたかったから	1	2	3	4	5
2	自分が本当にしたいことを見つけたかったから	1	2	3	4	5
3	自分の希望している職業に必要な資格を取りたかったから	1	2	3	4	5
4	大学・短大を出た方が就職や就職後の昇進に有利だと思ったから	1	2	3	4	5
5	視野を広げたかったから	1	2	3	4	5
6	まわりのみんなが大学・短大に進学したから	1	2	3	4	5
7	大学・短大の学生生活を楽しみたかったから	1	2	3	4	5
8	自分の好きな勉強をしたかったから	1	2	3	4	5
9	大学・短大に進学してから、自分に合った職業を考えたかったから	1	2	3	4	5
10	先生がすすめたから	1	2	3	4	5
11	家族がすすめたから	1	2	3	4	5
12	大学・短大に進学するのは当然だと思っていたから	1	2	3	4	5
13	自分を高めたかったから	1	2	3	4	5
14	まだ就職したくなかったから	1	2	3	4	5
15	自分が納得できる生き方を見つけたかったから	1	2	3	4	5

Ⅱ．この大学・短大を選ぶ際に、あなたはどのようなことを重視しましたか。それぞれの項目について、自分の気持ちにもっとも近い程度を１つだけ選んで、数字に○印をつけてください。

		まったく重視しなかった	あまり重視しなかった	どちらともいえない	ある程度重視した	非常に重視した
1	将来の仕事に役立つ知識や技術を身につけられること	1	2	3	4	5
2	自分の興味のある分野が学べること	1	2	3	4	5
3	自分の成績で入れること	1	2	3	4	5
4	有名大学・短大であること	1	2	3	4	5
5	就職実績が良いこと	1	2	3	4	5
6	学風（学校の雰囲気）が良いこと	1	2	3	4	5
7	学費が安いこと	1	2	3	4	5
8	通学に便利なこと	1	2	3	4	5
9	キャンパスの環境が良いこと	1	2	3	4	5

Ⅲ．大学・短大に進学できたことと、次にあげることがらはどれくらい関連していたと思いますか。進学達成への関連性を判断して、あてはまるところに○印をつけてください。

		関連していない	あまり関連していない	どちらともいえない	ある程度関連している	非常に関連している
1	入学試験の難易度	1	2	3	4	5
2	試験・面接の時のがんばり	1	2	3	4	5
3	自分の能力	1	2	3	4	5
4	運・偶然	1	2	3	4	5
5	試験・面接当日の体調・気分	1	2	3	4	5
6	日頃の努力の積み重ね	1	2	3	4	5
7	入学した学部・学科の入試問題の傾向	1	2	3	4	5
8	先生・親の助け	1	2	3	4	5
9	自分の学力	1	2	3	4	5

Ⅳ．あなたは、現在の専攻・専門と将来の就職との関係についてどのように考えていますか。あてはまるものを１つ選んで番号に○印をつけてください。

1　ぜひとも専攻・専門と関連のある仕事につきたい
2　なるべく専攻・専門をいかせる仕事につきたい
3　就職のときはいかせなくても、将来は専攻・専門と関連のある仕事につきたい
4　現在の専攻・専門と就職とは関連しなくてよい
5　その他（具体的に記入：　　）

Ⅴ．あなたが将来、就職する際に、以下のことをどの程度重視すると思いますか。それぞれの項目について、自分の気持ちにもっとも近い程度を１つだけ選んで、数字に○印をつけてください。

		まったく重視しない	あまり重視しない	どちらともいえない	ある程度重視する	非常に重視する
1	安定した会社や勤め先であること	1	2	3	4	5
2	給与やボーナスが高いこと	1	2	3	4	5
3	創造性・独創性を発揮する機会があること	1	2	3	4	5
4	勤め先の福利厚生施設が充実していること	1	2	3	4	5
5	昇進の可能性が高いこと	1	2	3	4	5
6	上司との人間関係がよいこと	1	2	3	4	5
7	仕事仲間との人間関係がよいこと	1	2	3	4	5
8	困難な仕事へ挑戦する機会があること	1	2	3	4	5
9	社会的責任のある仕事であること	1	2	3	4	5
10	家庭的な雰囲気の職場であること	1	2	3	4	5
11	仕事をつうじて社会に役立つこと	1	2	3	4	5
12	自分の能力がためされる機会があること	1	2	3	4	5
13	仕事をつうじて勉強し成長する機会があること	1	2	3	4	5
14	自分の力で何事かを成しとげる機会があること	1	2	3	4	5
15	職場のみんなから受け入れられること	1	2	3	4	5
16	終身雇用制であること	1	2	3	4	5
17	人の役に立つ仕事であること	1	2	3	4	5
18	勤務地が地元（出身地）であること	1	2	3	4	5
19	勤務時間に柔軟性（フレックス・タイムなど）があること	1	2	3	4	5

20	取得した資格が活用できる機会があること	1	2	3	4	5
21	職場が男女平等であること	1	2	3	4	5
22	有給休暇（介護、育児など）制度が充実していること	1	2	3	4	5
23	現在の居住地から通勤可能であること	1	2	3	4	5
24	転勤がないこと	1	2	3	4	5
25	社会に貢献している実感がもてること	1	2	3	4	5

Ⅵ．仕事についてのあなたの考えをおたずねします。次の各文について、あなたの考えにあてはまる番号に○印をつけてください。

		まったくあてはまらない	ややあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる
1	自分は職業の上で将来の目標があるので、それを実現させるために自分でいろいろ考えてやっていく	1	2	3	4
2	自分の選んだ職業を通じて、自分にどれだけ力があるのか確かめてみることに、大きな関心をもっている	1	2	3	4
3	将来の職業のことについては、できるだけ考えないようにしている	1	2	3	4
4	自分が興味を持っている職業の内容は十分知っているので、就職のためにどのような条件が必要であるかはよくわかっている	1	2	3	4
5	自分の職業は自分で選び、その選択に対して自分で責任を負う必要がある	1	2	3	4

Ⅶ．次の各文について、あなたはどれくらい自信がありますか。あなたの自信の程度にあてはまる番号に○印をつけてください。

		まったく自信がない	ややあまり自信がない	ややある自信がある	非常に自信がある
1	自分の将来設計にあった職業を探すこと	1	2	3	4
2	自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶこと	1	2	3	4
3	自分の理想の仕事を思い浮かべること	1	2	3	4
4	自分が従事したい職業（職種）の仕事内容を知ること	1	2	3	4
5	将来のために、在学中にやっておくべきことの計画を立てること	1	2	3	4

Ⅷ. あなたは、何のために働く（仕事をする）のですか。以下のことがらのうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。

1　達成感を得るため
2　自分の能力や創造性を発揮するため
3　趣味や興味を仕事で実現するため
4　余暇や趣味に使うお金を得るため
5　職場の人々や顧客との交流のため
6　地域や社会に貢献するため
7　社会の一員として認められるため
8　自分自身や家族の生活の糧を得るため
9　働かないのは世間体が悪いため
10　その他
（具体的に記入：　　）

Ⅸ. 最後に、あなた自身のことについておたずねします。該当する数字を○で囲むか、カッコ内にあてはまる答えを記入してください。

1　あなたの年齢：（　　）歳
2　あなたの性別：1　男　　2　女
3　あなたの出身地：1　沖縄県　　2　沖縄以外の都道府県（　　）
3　日本以外の国（　　）
4　あなたの学部・学科等：学部（　　）学科等（　　）
5　あなたの学年：1　一年　2　二年　3　三年　4　四年　5　大学院　6　その他
6　入学した学部・学科は第何志望でしたか：1　第一志望　　2　第二志望
3　その他
7　あなたは入学した大学・短大での学生生活に、どの程度期待していますか。
1　全く期待していない　　2　どちらかというと期待していない
3　どちらともいえない　　4　どちらかというと期待している
5　非常に期待している
8　あなたはこの大学・短大に進学したことについて、どの程度納得していますか。
1　全く納得していない　　2　どちらかというと納得していない
3　どちらともいえない　　4　どちらかというと納得している
5　非常に納得している
9　総合的にみて、あなたは入学した学部・学科に、どの程度満足していますか。
1　非常に不満　　2　やや不満　　3　どちらともいえない　　4　やや満足
5　非常に満足
10　今後の大学・短大生活の中で、あなたがしてみたいことは何ですか。最もしてみたいと思うことを１つだけ、下記の空欄に具体的に記入してください。